# 『宇治拾遺物語』の卑罵表現の一考察

藁谷隆純

## 一、はじめに

説話文学の中でも、生身の人間の愚賢・醜美等を一段と赤裸々に生き生きと鮮やかに、かつ寛容の眼で描くと評される『宇治拾遺物語』には、ほめ言葉の対極にある、いわばマイナス待遇とも言うべき卑罵表現の多用も、言語表現的に一特徴をなしていよう。ここではその〝卑罵〟につき、一般に言われる卑罵語の域を越えて、文字通り他を、①卑める・軽んじる、②罵る・そしる要素の表現を広義にとらえて論じたい。ただし、自己を卑める表現は対象とせず、他を卑める表現のみを、品詞別に考察したい。

そして、本稿では、いくつかの説話に絞り、その本文に則して、卑罵表現の実態・効果等を、解釈文法的に具体的に論じてみたい。また、同話・類話の他書（『今昔物語集』等）とも少々比較し、諸注釈書も参照しながら考察する。

尚、引用文の末尾の、例えば（三―8）は、（巻三―第8話）の意である。また、例えば〔あづま人→犬ども〕は、上が話し手、→の下が聞き手を示す。

## 二、代名詞（その一）

では先ず、代名詞から見て行きたい。

### 1、おのれ（ら）

このあづま人……此櫃にみそかに入臥して、左右のそばに、この犬どもを取り入れていふやう、〔あづま人→犬ども〕「[a]をのれら、この日比いたはり飼ひつるかひありて、此のたびの我が命にかはれ。[b]をのれらよ」

といひてかきなづれば……この横座に居たるをけ猿、寄り来て、……ふたを開けんとすれば、次々の猿ども、みな寄らんとする程に、此男、「犬ども食らへ。[c]をのれ」といへば、二の犬、おどり出でて、中に大なる猿を食ひて……食殺さんとする程に、此男、髪を乱りて、櫃よりおどり出でて、……その猿をまな板の上にひき伏せて、首に刀をあてていふやう、〔男→猿〕「[d]わおのれが人の命を断ち、そのしゝむらを食などする物は、かくぞある。[e]をのれら、[f]うけ給はれ。[g]たしかにしや首切て、犬に飼ひてん」といへば……手をすりかなしめども、さらに許さずして、〔男→をけ猿〕「[h]をのれが、そこばくのおほくの年比、人の子どもを食ひ、人のたねを断つかはりに、[i]しや頭切りて捨てん事、たゞ今にこそあめれ。[j]をのれが身、さらば、我を殺せ。更に苦しからず」といひながら…宮司、神主より初て、多くの人ども「たゞ御神に許し給へ……」といへるも、このあづま人、「さなすかされそ。人の命を断ち殺す物なれば、[k]きやつにもののわびしさ知らせんと思うなり」（一〇―6）[1]

右話には、「おのれ」系統の卑罵語の頻出が特徴的である。あづま人と犬達による悪猿どもへの懲らしめの場面ゆえであろう。傍線部hとjの「おのれ」は単数で、首領の大猿一匹のみへの卑罵語であり、その複数形であろう「おのれら」は、a・bがあづま人から犬たちへ、eが猿どもへの卑罵語である。（ここでは「おのれども」なる複数形は見られない）。このように、接尾語「ら」の有無により、猿の単複を描き分けており、数的に内容が大変とらえ易くなっている。dの「わおのれ」はまず皆への見せしめとして代表者のボス猿一匹へ、そして直後にe「をのれら」と皆の猿へ呼び掛けている様子が明確に読み取れよう。dの「わおのれ」の接頭語「わ」は親愛・軽蔑の二ケースがあるが、ここは場面的に当然軽蔑の意で、一方、犬へは「おのれ(ら)」のみで「わおのれ」は用いてない。ボス猿へのみ「わおのれ」と、いわば二重に貶めている。畜生へ同じく卑罵語使用はしているものの、善犬と悪猿とに待遇的に差別を見せているとは言えまいか。

また、Cの「おのれ」については、「全集」[2]は「（犬ども食いつけ。）それ」と感動詞的に訳し、卑罵語と取らない。「新大系」は「相手をいやしめ、ののしっていう言葉。こんちくしょう。このやろう」と卑罵の感動詞的に解している。『今昔』（二六―7）では、

……男俄ニ出テ、犬ニ「噉、ヲレ〳〵」ト云ヘバ（「新大系」）

とあり、「ヲレ〳〵」につき、「掛け声であろう。宇治拾遺『をのれ』は二人称代名詞」と注している。仮にC「おのれ」を犬どもへの卑罵語とした場合、複数形「おのれら」等となっていないのも、やや問題点である。（『三本対照宇治拾遺物語』[3]でも、「をのれ」のみで、「をのれら」は見られない。）

それから、kの「きやつ」も同じく卑罵の代名詞で、これは対称ではなく、常に他称に用いられる。この「きやつ」は本書では他に、兄（家綱）から目下の弟（行綱）へ（五―5）、或いは、国司から（熱田）大宮司なる神職へも（三―14）、用いられている。

以上、本話では、卑罵の代名詞が多きを占めるが、卑罵の接頭語として、「しや」が二例（g、「しや首」、i「しや頭」）見られる。

ともあれ、本話は、卑罵の代名詞「おのれ」中心の説話と言えよう。

ところで、次のような文がある。

かくて、夜明けにければ、物食ひしたゝめて、いでて行を、この家にある女、いで来て、「えいでおはせじ。とゞまり給へ」といふ。「こはいかに」と問へば、〔女主→旅人〕「をのれは金千両負ひ給へり。そのわきまへしてこそ出給はめ」といへば、（一―8）

右の「おのれ」を、「新大系」は「お前は（金千両を借りておいでです）」と訳し、「相手をいやしめる『おのれ』と敬語がそぐわない。古活字本の「おのれが」なら、「おのれ」は一人称となり文意が通ろう」と注する。「全集」は「おのれが金千両を負ひ給へり」の本文を「あなたは私の金千両を借りていらっしゃる」と訳す。即ち、「おのれは」の本文だと主語、「おのれが（金）」の本文だと、連体修飾語になる。文脈的、敬語法的には、「おのれが（金）」の本文の方が良いと考えられ、よって本話は、本稿の用例にはしないこととする。

2、われ

近くなれば、此童部は見えず。此僧に問ふ、〔海賊→僧〕「我は京の人か。いづこへおはするぞ」と問へば、「ゐ中の人に候。法師になりて、久しく受戒をえ仕らねば、…」…〔海賊→僧〕「わ僧の頭や腕に取付たりつる児共は、誰そ。何ぞ」と問へば、（一〇―10）

右の「我」を、「新大系」は「そなた。おまえ」と注し、

「全集」は「おまえは」と訳している。しかし、第二文では尊敬語「おはする」を用いており、一見、待遇表現的には矛盾しよう。『古語林』[4]はここを「あなたは」と訳している。

更に、右の「わ僧」につき、「新大系」は「『わ』は親しみ、あるいは軽んずる気持をそえる接頭語」と注し、「全集」は「おまえ（の頸や腕に）」と卑罵語に解している。親愛か軽蔑か両様かの判別はむずかしい面もあり、確かな用例とするには慎重であるべきだが、実はこの海賊は、話末にてこの僧に導かれて発心出家するという大転換を見せるけれども、この海賊は、本説話の冒頭より舟の僧達へ高圧的な言動を貫いているわけでもあり、一応、ここの「我」「わ僧」を卑罵語と把えておきたい[5]（従って、この「おはする」は形式的な敬語で、余り敬意はないかもしれない）。

3、おれ

…伴大納言の出納の家の幼き子と、舎人が小童といさかひをして…舎人思ふやう、「我子も人の子も、ともに童部いさかひなり。たゞ、さてはあらで、我子をしもかく情なく踏むは、いと悪しき事なり」と腹立たしうて、「まうとは、いかで情なく、幼きものをかくはするぞ」といへば、出納いふやう、「おれは何事いふぞ。舎人だつるおればかりのおほやけ人を、わがうちにたらんに、何事のあるべきぞ。わが君、大納言殿のおはしませば、いみじきあやまちをしたりとも、何事の出で来べきぞ。しれ事いふかたいかな」といふに、舎人、大きに腹立て、「おれは何事いふぞ。わが主の大納言をかうけに思ふか。おのが主は我口によりて人にてもおはするは、知らぬか。我が口あけては、をのが主は人にてはありなんや」といひければ、出納は腹立ちさして、家にはい入にけり。（一〇—1）

子供のケンカが父親同士のケンカに発展する本話の卑罵表現は、aの「おれ（は何事いふぞ）」から始まる。二度目のb「（舎人だつる）おれ（ばかりのおほやけ人）」は、「だつる」「ばかり」等のやはりここでは広義の軽侮的用法の接尾語・副助詞を前後に付加して、一段とおとしめている訳である。待遇的に最も興味深い点は、ケンカの始めに、舎人は出納へ、「まうと」なる二人称代名詞で遇したのだが（「まうと」は敬語・卑語両説有り。「新大系」は「まうと」を「あなた。お前」と訳す）、「しれ事いふかたいかな」と卑罵の決定的名詞を言われて、遂に「おれ（は何事いふぞ）」と、出納から浴びせられたと全く同じ卑罵的文を、

出納へ投げ返している事である（これは或いは卑罵度が「まうと」より「おれ」の方が高いことを示すか）。それは口論時の言語としてリアリティーがある。更に舎人は、「おのが（主）」なる対称の卑罵的代名詞（連体格）をも二度用いて、形勢一転、出納（ひいてはその主伴大納言）を脅している。

ともあれ、本話は、卑罵表現（「おれ」「かたゐ」他）を一つの要とする説話と言えよう。

以上の「おのれ」「われ」「おれ」は、歴史的に対称・自称の両様を有する代名詞グループである。

## 三、代名詞（その二）

### 4、なんぢ（汝）

孔子云、〔盗跖ノ兄・柳下恵ニ〕「……よし見給へ。教へて見せ申さん」と言葉を放ちて、盗跖がもとへおはしぬ。……盗跖がいはく、「汝[a]来れる故はいかにぞ。たしかに申せ」……〔孔子→盗跖〕「……されば、猶、人はよきにしたがふをよしとす。然ば、申にしたがひて、いますかるべき也。その事申さんと思て、参りつる也」といふ。……〔盗跖→孔子〕「汝[b]がいふ事ども一もあたらず。その故は、昔、堯（ママ）・舜と申二人の御門、世にたうとまれ給き。しかれども、その子孫、世に針さす斗の所をしらず。……汝[c]、又、木を折て冠にし、皮を持て衣とし、世をおそり、大やけにおぢ奉るも、二たび魯にうつされ、跡を衛にけづらる。など、かしこからぬ。汝[d]がいふ所、誠におろかなり……」（一五―12）

「全集」は、右の四つの「汝」をすべて「おまえ」と一貫して卑罵語に訳している。孔子の方が盗賊の盗跖へ敬語を用いているにかかわらず、盗跖は、堯（ママ）、舜や大やけへは敬語を使用しているものの、孔子へは一度も敬語を用いていない。否、それどころか、右の「（たしかに）申せ」と盗跖は自敬語的なものを使用していることなどから、聖人孔子を己より下に見ている事は明らかである。故に、右の「汝」はすべて、軽い敬意の「アナタ」よりは、「オマエ」と卑罵語に訳すが妥当と考える。gの「（誠に）おろかなり」なる形容動詞も、孔子への広義の卑罵表現と解せよう。

以上の如く、地の文では、作者は盗跖へは無敬語で孔子へ敬語使用だが、会話文では、孔子の方が盗跖へ敬語使用にもかかわらず、盗跖は孔子へ無敬語、というより卑罵待遇である点が、待遇表現的に（敬語→無敬語→卑罵語の三

段階)、二重三重にコントラストを成し、実に味わい深い表現効果を生んでいる。

ともあれ、本話は、卑罵表現(代名詞「汝」他)の効果的な説話と言えよう。

5、わたう(たち)

仲胤、「祇園の御会を待斗なり」と付たりけり。これをおのおの「此連歌は、いかに付たるぞ」と、忍びやかにいひあひけるを、仲胤聞て、〔仲胤僧都→僧達〕「やゝ、わたう、連歌だに付かぬと、付たるぞかし」といひたりければ、これを聞き伝へたるものども、一度に「はつ」ととよみ笑ひけりとか。(一四―8)

例えば、『古語林』は、

**わたう**[我党・和党]おまえ。おまえさん。相手を親しんで、また、少し軽蔑して呼びかける二人称。……「わ」は接頭語。

と述べる。右文の「わたう」を、「新大系」は「おまえたち」と複数の対称の卑罵語に解している。やはりここの「わたう」は、親愛感よりは目下の僧達へのやや軽蔑の意と考える。

因みに、「わたうたち」が、巻三―6にも、次の如く見える。

……〔絵仏師良秀〕家の焼くるを見て、うちうなづきて、時々わらひけり。……〔良秀→人々〕「……年比、不動尊の火焔をあしく書ける也。今見ればかうこそ燃えけれと、心得つるなり。これこそ、せうとくよ。この道をたてて世にあらんには、仏だによく書たてまつらば、百千の家も、出来なん。わたうたちこそ、させる能もおはせねば、物をも惜しみ給へ」と云て、あざ笑てこそ立てりけれ。

右の「わたうたち」を、「新大系」は「おまえさんたち」と訳し、「親愛・軽蔑の意をこめた対称の人代名詞」と注している。ここの「わたうたち」は、場面的・境地的に、良秀は人々を下に見ているであろう故、親愛よりは軽蔑の意の方が中心的であろう。複数の接尾語として、敬意でも卑意でもない「ども」を用いず、元来軽い敬意の「(わたう)たち」を用いたところに、逆に皮肉な心情がかもし出されるのかもしれない。

尊敬語(「おはせ」「給へ」)と卑罵語(「わたうたち」)との併存は、これも一見矛盾するが、「新大系」は「『おは

す』は敬語に皮肉の気持をこめている」と述べている。「させる能もおはせねば」と「物をも惜しみ給へ」の二尊敬語には、真の尊敬というよりは皮肉の要素がうかがえる。

ともあれ、本話は卑罵語・敬語使用が主題にかかわる重要な働きを見せていると言えよう。尚、右の二例の「わたう（たち）」は、ここではいずれも複数の用法と考えられる。

6、わ先生　　7、わぬし

……此大童子、走そひて、鮭を二、引ぬきて、ふところへひきいれてけり。……〔鮭ニ具シタル男→大童子〕「a わ先生は、いかで、此鮭をぬすむぞ」といひければ、大童子〔男ニ〕、「さる事なし。何を証拠にて、かうはの給ふぞ。b わぬしが取て、此童におほする也」といふ。……さる程に、この鮭の綱丁、「まさしく、c わ先生、取りてふところへ引入つ」といふ。大童子は又、d「わぬしこそ、ぬすみつれ」といふ時に、……此男、袴をぬぎて、ふところをひろげて、「くわ、見給へ」といひて、ひしひしとす。さて此男、大童子につかみつきて、「e わ先生、はや、物ぬぎ給へ」といへば、

（一―15）

対称代名詞として、綱丁の男から大童子へは「わ先生」のみ（三例）、大童子から綱丁へは「わぬし」のみ（二例）と、完全に使い分けられているのが特徴である。右の「わ先生」を、「全集」はａｃｅすべて「おまえ」と軽蔑語に訳している。ａの「わ先生」を、「新大系」は、「おまえさん」と訳し、「この場合は……ひやかしの言葉で、直訳すればじいさん……」と注する。〝親愛〟〝卑罵〟等よりは、〝ひやかし〟の心理と取るようである。ｅの「わ先生」を仮に卑罵とする場合、直後に尊敬語（「ぬぎ給へ」）を用いるのは、一見、そぐわない。もっとも、ここの「給へ」は余り敬意はなく、穏やかな命令文としての形式的、決まり文句的用法か。

一方、ｂの「わぬし」を、「全集」は「おまえが」と訳している。ここの「わぬし」を卑罵語と取ると、これ又直前の尊敬語（「の給ふ」）と一見そぐわないが、しかし、相反する不統一の待遇表現が、却って口論の場面らしく、現実的かもしれない。又、右の「の給ふ」は、或いは後ろめたさの心理の証か。いずれにせよ、Ｃの「わぬし」は、〝親しみ〟とは考えにくく、軽侮語と思われる。

ともあれ、本話は、いずれも接頭語「わ」を含む卑罵の代名詞（「わ先生」・「わぬし」）によって話が展開してゆくと言えよう。

以上の「なんぢ」「わたう（たち）」「わ先生」「わぬし」は、歴史的に対称のみの代名詞グループである。

## 四、名詞

では次に、名詞を見て行きたい。

1、かたゐ　　2、しれもの

……此内供、「〔コノ童ハ〕いみじき上手にてありけり。例の法師にはまさりたり」とて、粥をすゝる程に、この童、……はなをひる程に……粥の中へ鼻ふたりとうちいれつ。内供、大に腹立て、頭、顔にかゝりたる粥を紙にてのごひつゝ、〔内供→童〕「をのれ[a]はまが[b]〳〵しかりける心もちたる物かな。心なしのかたひ[c][d]と[e]は、をのれ[f]がやうなる物をいふぞかし。我ならぬやごつなき人の御鼻にもこそ参れ、それにはかくやはせんずる。うたてなりける、心なしの痴れ物[g]かな。をのれ[h]、たて〳〵」とて、追たてければ、たつまゝに、「世の人の、かゝる鼻もちたるがおはしまさばこそ、鼻もたげにも参らめ。おこの事の給へる御房かな」といひければ、弟子どもはもののうしろに逃のきてぞ、わらひける。　（二―7）

右の冒頭では、内供は童をほめていたのに、童がひとたび失敗するや、あまたの卑罵表現で童をそしる事誠におびただしい。そこに内供の人物像が如実に表われていよう。

c d「（心なしの）かたゐ」につき、「新大系」は「無分別のろくでなし」と訳し、「『かたゐ』（『かつたい』とも）は乞食。人をのしる時に用いる」と注する。「全集」は「考えなし（ろくでなし）の乞食」と注訳する。勿論ここの「乞食」は文字通りの意ではなく、卑罵語である。『今昔』（二八―20）は、

内供大キニ嗔テ……「己ハ、極カリケル心無シノ乞匂カナ。……」

と漢字表記で、「新大系」は「乞食。ここでは卑倒語」と注している。右の内供の会話文は、「かたゐ」（名詞）、「おのれ」（代名詞）、「心なし」（形容詞）その他の多くの卑罵的表現が中心をなす文章と言える。

尚、芥川『鼻』では、右の部分は描かれていない。

因みに、「かたゐ」については、巻四―7にも、次の如く見える。

……わがさりにし、古き妻なりけり。〔古キ妻→定基〕

「あのかたい、かくてあらんを見んと思ひしぞ」といひて、　（四―7）

「新大系」は「こじき。ものもらい。賤称として定基を侮辱するのに用いている」と注する。「今昔」（一九―2）では、

女ノ云ク、「彼ノ乞匂、此クテ乞食セムヲ見ムト思ヒシヲ」

と、同じ漢語「乞匂」を、「新大系は」「こつがい」と音読している。そして、『今昔』は名詞の方を「乞匂」、複合サ変動詞の方を「乞食セ（ム）」と、漢字表記を書き分けている。右では、「かたゐ」は元妻から自分を捨てた元夫への痛烈な卑罵語であり、「あの」というここでは卑罵的語と共に効果的に用いられている訳である。

「かたゐ」は更に巻一〇―1にも次のように見られる。

出納〔舎人二〕いやふう、「おれは何事いふぞ。……しれ事いふかたいかな」といふに、　《前出》

尚、本話の原拠とも目される『伴大納言絵詞』[6]では、

おれはなにことといふぞ……しれことするかたいかなといふに

となっている。「おれ」「しれ事」等の卑罵的語と共に用いられている。

但し、次のような例がある。

……和尚、「かゝるかたいの身にて候へば、いかでか、まかりのぼるべき」とて、更にのぼらず。……僧都に任べき由、宣下せらるれども、「かやうのかたゐは、何条、僧綱に成べき」とて返し奉る。　（一五―8）

「新大系」は右を「乞食の身。人々の差別感に対しいなおってみずからを卑めたもの」と注する。本稿では他を卑める表現を中心に考察しているため、右の「かたい」（二例）は用例に含めないこととする。

さて、右の巻二―7に戻るが、hの「痴れ物」も卑罵的語で、同じく卑罵的表現の「心なしの」に修飾されている。すなわち、cdの「心なしのかたゐ」とghの「心なしの痴れ物」とはほぼ同意の卑罵表現で、対の意識がうかがえる。尚、『今昔』（二八―20）には「不覚ノ白物カナ」とあり、「馬鹿者め。白痴シレモノ（字類抄）」と注する（「新大系」）。因みに、芥川『鼻』には、この部分も見られない。

高貴な僧が、身分的・年齢的に比較にならぬ程下の童へ、あるまじき下品な言葉を乱発するおかしさが、卑罵語の多

用により、かもし出されていよう。

尚、巻六―8にも、

翁あざわらひて〔孔子ニ〕「いみじきしれ物かな」

といひて去りぬ。

とある。『今昔』（一〇―10）では、「此レ、極タル嗚呼人也」となっている。ともあれ、極めて優れた人物とされる孔子を、「バカ者」とののしる事の、おかしみ・痛快さが、卑罵語によって効果的に表現されていよう。

3、盗人

…たゞ老をかうけにていらへおる。いかにしてこれを許さんと思て、「大隅守→郡司」「をのれはいみじき盗人かな。歌は読みてんや」といへば、（九―6）

「新大系」は、「お前はまったくとんでもないやつだな。『盗人』は人をののしっていう語」と注する。同じく卑罵的な対称代名詞「おのれ」と併用されている。よって、『宇治拾遺』の「盗人」は、普通の意（数例）と罵倒語（この一例）と、二種あることになる。因みに、現代語では卑罵語として「盗人」「泥棒」等を用いる事はほとんどないであろう。

4、くさり女

此さたに従者がいふやう、「郡司が家に、京の女房といふ物の、かたちよく髪長きがさぶらふを、隠し据へて、殿にも知らせ奉らで、置きてさぶらふぞ」と語ければ、〔さた→従者〕「ねたき事かな、[a]わ男、かしこにありし時はいはで、こゝにてかくいふはにくき事也」といひければ…〔さた〕「げに、とく縫いてをこせたる女人かな」と、あらゝかなる声してほめて、…あやしと思て、ひろげて見れば、〔女〕かく書きたり。

われが身は竹の林にあらねどもさたが[b]ころもをぬぎかくる哉

と書きたるを見て、…大に腹を立てて、〔さた→女〕「目[c]つぶれたる女人かな。ほころび縫いにやりたれば、ほころびのたえたる所をば見だにえ見つけずして、『さたの』とこそいふべきに、かけまくもかしこき守殿だにも、まだこそ、こゝらの年月比、まだ、しか召さね。なぞ、[d]わ女め、『さたが』[e]といふべき事か。この女人に物ならはさん」といひて、[f]よにあさましき所をさへ、「なにせん、かせん」とのりのろひければ、女もおぼ

えずして泣きけり。…かく腹立しかりて、帰のぼりて、侍にて、「やすからぬ事こそあれ。[g]物もおぼえぬくさり女に、かなしういはれたる。かうの殿だに『さた』とこそ召せ。[i]此女め、『さたが』といふべきゆへやは」と、たゞ腹立ちに腹立てば、（七―2）

本話は、男への女房の助詞一つ（「が」）がきっかけで、女への卑罵表現が頻出する。gの「くさり女」から見て行けば、まずこれは複合名詞（動詞十名詞）である。『日本国語大辞典』（第二版、二〇〇一年）では、

**くさりおんな**［腐女］「くされおんな（腐女）」に同じ。

とあり、『宇治拾遺』の右例と、時代は下って『心中天網島』、『即興詩人』等の用例が記され、また、

**くされおんな**［腐女］女をののしっていう語。くされあま。くさりおんな。

とあるが、用例の記述はない。

次に、『広辞苑』（第四版、一九九一年）には、

くされ［腐れ］……㊀（接頭）ある語に冠して、ののしる意を表す語「――尼」

とある。このように、「くさり女」「くされ女」はあるが、「くさり男」「くされ男」等が辞書の見出し語に余り見られないのは興味深い。

さて、右文の始めに戻れば、aの「わ男」を「新大系」は「おまえ。きさま」と卑罵語に注す。それと接頭語的に対をなすのがdの「わ女め」である。これは更に卑罵の接尾語「め」をも付している。いわば接辞中心の卑罵語と言えよう。その接尾語のみを付したのがiの「女め」である。bの「が」と「の」については言い古されてきたので割愛したい。Cの「目つぶれたる（女人）」は身体にまつわる卑罵表現（連語）で、ほころびを見つけて縫ってくれなかった女への非難だから、耳・口・鼻等ではなく、「目」となっているわけである。fの長い部分は女の陰部の悪口を言ったと考えられるから、広い意味では卑罵表現であろう。gの「物もおぼえぬ」（連語）を、「新大系」は「分別もない（つまらぬ女）」と訳しており、これも広義の卑罵表現と言えよう。右文の前半部で、一旦は、「とく縫いてをこせたる女人かなと……ほめて」とある如く、ほめた直後に、徹底的に多くの卑罵表現で女をののしりまくったそのギャップに、本話の面白さの一つがあると考える。

以上の「しれもの」「くさり女」は、文字通りの一つの意のみの名詞グループだが、「かたゐ」「盗人」の方は、文字通りの意と人を罵倒する意との二つの意を持つ名詞グループと言えよう。

## 五、おわりに

以上、『宇治拾遺物語』の卑罵表現につき、いくつかの説話に限定して、卑罵表現から読み取れる人間対人間（動物のことも有り）の心理・感情を中心に少々論じてみた。このように、現実の人間を描くには、敬語のみではなく、卑罵表現が看過できない効力を有することが改めて認識させられた。品詞的には代名詞・名詞の体言を中心とした考察となり、紙幅の関係もあり、接頭語・接尾語・形容詞・感動詞その他については十分に論じられなかった。本稿ではいくつかの説話中心の論究を主としたため、『宇治拾遺物語』の卑罵表現の全体的体系化、又、他の説話文学、更に説話以外の作品における卑罵表現等の考察は、今後の課題としたい。

注

（1）本文は、『新日本古典文学大系』（岩波書店、平成十年、第六刷）による。

（2）『日本古典文学全集』（小学館、昭和五十七年、第十版）。

（3）『三本対照宇治拾遺物語』（桜井光昭編、武蔵野書院、平成九年、再版）。

（4）大修館、平成九年、初版。

（5）佐藤亨氏「人称の交替と待遇――その歴史的変容――」（創価大学『日本語日本文学』第十二号、平成十四年）にても、「我（われ）は京の人か。」の「我（われ）」につき、「ワレは、汝の意で相手を卑しめたもの」とある。同論文には種々教示を受けた。

（6）『日本絵巻大成2』（中央公論社、昭和五十二年）による

（わらがい・たかすみ、本学教授）